



雪と氷の世界で見つけたもの

1月×日

昨日晩ご飯を食べていたら、突然「明日、仕事入りました」と言われた。「ああ、明日も『アブレ』じゃない」。ホッとしたんだけど…。

今日、仕事場に行くと、立っているのは小学3年生。「よろしくお願ひしまーす」ということで、レッスン開始。しかし初心者があ…。今日は滑れないなあ…。

* * *

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひいたします。

ところで、わたしはお正月や休みの日、たまにスキースクールのお手伝いに行きます。「仕事場」というのは、実はスキー場のゲレンデのことです。

「インストラクター」と言うと、ほとんどの人は「いいなあ」と言われます。たしかに、リフト券・ユニフォームどころか、わたしが行っているスクールの場合は食事や宿泊までスクールが持ってくれるので、すごく恵まれています。その一方、吹雪であろうが雨が降ろうが、生徒さんが「滑りたい」と言われたら滑らなくちゃなりませんし、自分勝手に滑るわけにもいきません。一スキーヤーとしては、一長一短というところでしょうか。

ところで、スキースクールで教えていると、いろいろな人と出会います。実人数は少ないものの、その多様さは、学校とはけた違いです。このお正月は、先に紹介した小学生から上は60歳くらいの方まで、技術レベルも初心者から上級者まで担当しました。そんな出会いの中で、学校の教員としてたくさんのこと教えてもらいました。そんなことをいくつか書かせてもらうことにします。

また来たいと思わせた？

スキースクールと言えど、しょせんは民間の学校です。生徒さんが来なければ、当然つぶれます。生徒さんに来てもらうためには、「また来たい」と思ってもらえるようなレッスンをしなくてはなりません。昔はギャグを飛ばすことが「おもしろい

レッスン」と思っていましたが、どうやら違うらしいと、数年前に気づきました。やっぱり「できた！」「うまくなった！」という満足感こそが大切みたいです。そうそう、上級者の中には「できないことがある」ことを知ってファイトを燃やす人もいます。年長者の中には「上達よりも、楽しい時間を過ごしたい」という人もいます。ほんとうにいろいろな満足感があるなあとと思いました。いろんなことを試してみよう

昔は班わけのたびにドキドキしていました。なにせ、一本滑ってもらっただけで、「めざす技術」「矯正点」を見極めなければなりませんから。

レッスン中、リフト上では、常に「次に何をしようかな」と考えています。小さなハードルで細かくいこうか。あえて大きなハードルを設定しようか。同じことばかりやると、生徒さんは飽きます。できることばかりやると、生徒さんは劣等感を持ちます。さまざまなバリエーションを試して、課題克服のヒントをたくさん提供します。いろいろ試して、生徒さんに「OKです！」という言葉をかける時が、一番うれしい瞬間ですね。

できなくてあたりまえ

先輩から「レッスンは口でするな！」と、いつも言られてきました。やっぱりスキーは滑ってなんぼです。インストラクターの滑りをどれだけ見てもうまくはなりません。練習を繰り返してうまくなるんですね。「そうか、最初はできなくてあたりまえなんだ」と、ある時気づきました。だからスクールがあり、レッスンがあるんですね。

ところで、普段高校で「土肥ちゃんの話、明日も聞こう」と思ってくれる授業をしてきたかな？うまく解けるようになるための一番いい「問い合わせてきたかな？」「いま、黒板でやったやん。なんできへんねん」と言ってこなかったかな？

ふう、反省点ばっかりです。でも「できなくてあたりまえ」。そこからはじめてみることにしますか。

(土肥いつき 高校教員)